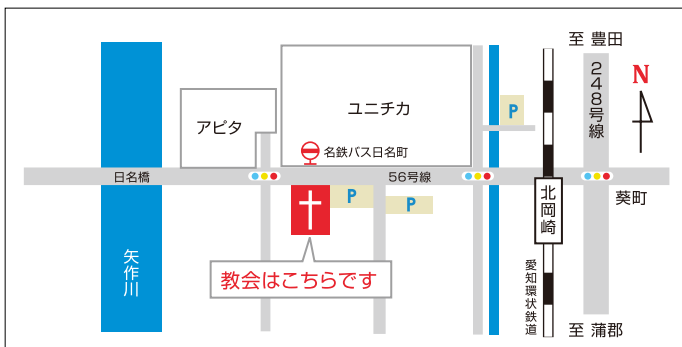


# BIBLE + MESSAGE

祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。  
そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者が  
それを心に留めるようになるからだ。（伝道者の書7章2節）

大変興味深い言葉です。「祝宴の家」とは、結婚式が行われ、幸せ一杯な家のことであり、「喪中の家」とは、人が亡くなって、悲しみにつつまれている家のことです。人は誰しも、悲しいことより、幸せなことを好むものではないでしょうか。しかし、この書を書いたソロモンは、「喪中の家に行くほうがよい」と言うのです。その理由は、生きている者が、「すべての人に終わりがある」ということ、つまり、自分もいつか死ぬ時が来ることを心に留めるようになるから、でした。

私たちは普段、死ぬ時が来るということをあまり考えないのかもしれませんが、特に若いうちはそうでしょう。生きていることを当然のことのように思っています。しかし、喪中の家に行く時、いま自分が生きているのは、当然のことではないと気づかされるのです。そのことを通して、人は謙遜な心にさせられ、周りのあらゆるものによって、自分が「生かされている」という感謝の思いを持つことができるようになるのではないのでしょうか。喪中の家に行くことの大切さを覚える者でありたいと思います。



- ◆名鉄バス「日名町」前
- ◆愛知環状鉄道「北岡崎駅」から  
西へ徒歩3分
- ◆アピタ北岡崎店 筋向かい



スマホで上記のQRコードを  
読み込むと地図を表示できます。

【日曜学校】日曜：午前10時～10時45分 【礼拝】日曜：午前11時～12時半  
【午後の集会】日曜：午後3時～4時半 【聖書研究会】木曜：19時半～21時

## 聖書を読んだ日本人



五十嵐 健治  
(いがらし けんじ)  
1877年～1972年

「白洋舎」という名前を聞かれたことのある方は多いと思います。日本で初めてドライクリーニングを始めた会社です。岡崎市市内にも店舗がありますので、利用された方もおられるでしょう。五十嵐健治はこの白洋舎の創業者です。

健治は明治10年、新潟の県会議員、船崎資郎の次男として生まれます。しかし、両親が離婚してしまい、彼は幼い頃から小間物屋、呉服屋、酒屋、旅館など、さまざまな場所で奉公人として働きました。こうした経験は、後に彼が実業家としての道を歩み出すきっかけの一つとなったでしょう。さて、健治が18歳の頃、彼は北

海道に渡るのですが、ある人に騙されて※タコ部屋に送り込まれることになりました。そこでの過酷な労働に耐えかねた健治は、必死の思いでそこを逃げ出し、70キロの道のりを経て小樽まで辿り着きます。彼は人生に絶望し、小樽の海で死ぬことも考えたそうです。そんな時、旅館で出会った中島佐一郎というクリスチャン商人との出会いが、彼の人生を大きく変えることになりました。中島氏より聖書の教えを聞いた健治は、キリストを信じる信仰に至るのです。そして、彼はすぐに中島氏から洗礼を受け、クリスチャンとしての歩みを始めました。

その後、健治は三井呉服店（現

在の三越）で働き始めるのですが、日曜日の礼拝を守ることができなくなっていたこともあり、退社することを決意。そして、明治39年（1906年）、彼は「白洋舎」を創立するのです。当時、洗濯屋は人々から低く見られていました。しかし健治は、「人の汚れたものを綺麗にしてお返しすることは、キリスト教徒の仕事にふさわしい」と語ったそうです。そんな彼は翌年、水を使わないドライクリーニングを独力で開発。白洋舎は日本全国のクリーニング店の先駆けとなっていくのです。

※タコ部屋…主に戦前の北海道で見られた強制労働所のこと。